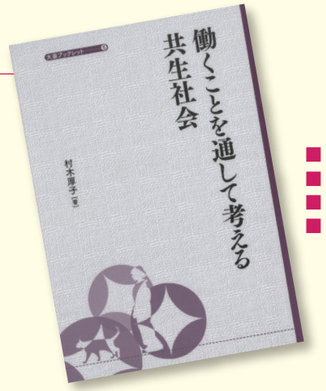
働くことを通して考える共生社会



■ 村木 厚子 著
■ 日本経済評論社
■ 2021年初版
■ 1,300円(税別)

前半は、中学時代は引っ込み思案で人見知り、友達も少なかった著者が、地元の大学を卒業後、国家公務員として厚生労働省で働き、一般職員トップの事務次官になるまでを振り返りながら綴る、若い女性たちへの応援メッセージである。

仕事をすることで「進歩していく」面白さを知った著者は、ポストが上がると、何かが見えるようになり、できるようになると実感。管理職への昇進を躊躇する女性たちに「昇進のオファーは受けよ」と勧める。仕事と子育ての両立においても、「悩む時は生産的に悩め」「絶対に“貸し借りの感覚”だけは忘れるな」と具体的にアドバイス。さらに「仕事で一番面白いのは課長、次は局長」というくだりでは、管理職の先輩女性たちによる的確で温かい助言に助けられ、少数であるがために営々と引き継がれてきたよき連鎖に恵まれたと述懐する。

後半は、思いもよらぬ郵便不正事件の冤罪に巻き込まれたことによって、常に「支える人」であった著者が、初めて「支えられる人」の側を経験。無罪判決後、東日本大震災の避難所視察では、被災した人々に逆に励まされ、人は何かの役に立つことで生きる勇気を得られることを知る。福祉の肝要は、ハンディがある人が支える側に回れることではないかと気づくのである。「共生社会」とは、誰もが相互に尊重しあい、多様な在りようを認め合う社会であり、障害のある人も働き、さまざまな人たちを巻き込んで社会を支えることで「包摂的な成長」を実現できると訴えている。

北九州市立文学館 館長　**今川 英子**さん

管 理職と女性

1999年に「男女共同参画社会基本法」が施行され、2003年に政府は、2020年までの女性管理職比率の目標を30%になるよう掲げた。2015年には「女性活躍推進法」が成立、2019年にその取り組みは強化されたが、2021年におけるその（課長相当職以上）比率は全国で8.9%（帝国データバンク調査）にすぎない。その要因として「女性自身が管理職になりたがらない」「家庭生活と仕事の両立を支える体制整備に課題がある」などが挙げられている。

時代をきりひらいた日本の女たち

■ 落合 恵子 監修
■ 小杉 みのり 文
■ 岩崎書店
■ 2021年初版
■ 4,500円(税別)

統計によると、2021年の小中学生女子の「将来なりたい職業」は、小学生がパティシエや教師、保育士。中学生になると会社員や公務員、看護師などがランキングの上位を占めるという。

そんな現実的な夢を持つ今の女の子たちは、『時代をきりひらいた日本の女たち』（岩崎書店刊）をどんな風に読み、貴重なメッセージ「権利の上に眠るな」をどんな風に聞くだろうか。

監修した落合恵子さんと文を書いた小杉みのりさんが、すべてのページにひらがなのルビをふり、朝野ペコさんの明るいイラストを添えたのは、ケーキづくりに憧れる女の子や漫画大好き少女たちが、放課後の静かな図書館で、ワクワクしながら、このずっしりと重い本を読み耽る姿を思い描いてのことだったに違いない。

考えてみれば、私も子どもの頃は「歴史に学ぶ」意味や大切さが分からなかった。

明治の時代に実業家になった女性や、75年前、やっと女性参政権を得て初の国会議員になった女の人生など、遠い昔の、自分には無縁のものと思っていた。でもそんなことはない。社会に巡らされた壁が高かった時代、真っすぐに「自分を生ききった」女たちがいたことを知れば、大きな勇気をもらえるはずだ。また、時代が近づくにつれ、女性の職業が多様に広がっていくのが分かって、大人の私たちも目を開かれた思いにさせられる。

本書に綴られた31人の人生の物語が教えてくれるのは、「自分と他人を比較せず、自分の可能性を信じること」の大切さである。

映画監督・作家　**松井 久子**さん

権 利の上に眠るな

本書の中で特に私の心に響いたのが、市川房枝さんが若い女性たちに贈る言葉として大切にしたという「権利の上に眠るな」である。戦争が終わって法律が男女平等に改正され、さまざまな権利が与えられながら、75年を過ぎた今でも黙っている女性は少なくない。「権利の上に眠っていれば、その権利を取り上げられ、女たちは再び不自由な、あの戦前の地位に引き戻される心配がある」そんな房枝の危機感にこたえるのは、後に続く私たちだ。

マジョリティ男性にとってまっとうさとは何か
#MeTooに加われない男たち

■ 杉田 俊介 著
■ 集英社
■ 2021年初版
■ 920円(税別)

話題の「男性学」や「男性性研究」についての極めてよくまとまった本である。「ジェンダー論は進化＝深化する」という視点から見れば、最新のジェンダー研究を含めた一種のミニ百科事典にもなっている。著者が得意のポピュラーカルチャー（アニメや映画など）を巧みに使っているのも、理解を深めるのには便利だ。

基本的視座も「マジョリティとしての男性」、「（男性たちの）剥奪感」、さらに「男性とケア」など、ここ15年ほど評者（伊藤）が一貫して提案してきたものでもあり、深く共感できる（日本でほぼ最初にこうした議論を提案した評者の名前がどこにもないのは、ちょっとフェアではないように感じたけれど）。

「現にある構造的差別や制度的不公正に対する無関心、不干渉であり、それこそがマジョリティの特権」という視座も明確だ。ここから、現在、問題になっているトランス排除（トランスジェンダー、特にトランス男性への排除問題）について、遠藤まめたさんの定義「（差別の一つの定義として）マジョリティの人間が実態を無視した語りを広めて、マイノリティの経験や語りを無効化すること」を用いて議論している部分は、多くの人に読んでもらいたいところだ。

無自覚なマジョリティ男性の出口をきちんと示している（「正しい男」よりも「まっとうな男」をひとまず目指す）点や、剥奪感のなかでマジョリティ男性の「階級闘争」が生じていること、さらにラディカル・メンズリブの提案など、男性論に関心のある人には必読の一冊だ。

京都大学・大阪大学名誉教授　**伊藤 公雄**さん

ジ ェンダー論は進化=深化する

男性性研究の深まりの一方で、SOGI（性的指向および性に関する自己認識）の多様性の議論や、複合差別や交差性の議論、第三波フェミニズムやポストフェミニズムなど新しい動きが生まれている。本書は、こうした点もうまく整理している。

わかりあいたいのに、なぜかすれちがう
女と男、このしんどさは誰のせい？

毎日新聞論説副委員長　**元村 有希子**さん

■ 描き子 著
■ 永岡書店
■ 2021年初版
■ 1,400円(税別)

少し前に「ポテトサラダ論争」、というのが世間をにぎわせた。真偽は不明だが、スーパーマーケットの総菜売り場でポテトサラダを選んでいた子連れの女性が、見ず知らずの高齢男性から「母親ならポテトサラダぐらい作ったらどうだ」と、叱責されたという。

作ったことのある人なら、ポテトサラダ「ぐらい」ではないことは分かる。ジャガイモをゆで、熱々の皮をむき、キュウリを塩もみしたりタマネギを水にさらしたりと、かなりの手間がかかるのだ。「母親なら」も余計なお世話である。おそらくこの男性にとっては、家事も育児も完璧にこなす「良妻賢母」以外、母親とは認められないのだろう。

ここまで極端ではないとしても、社会的な性差にかかわる固定概念――ジェンダーバイアスは誰もが持っている。そこから自由になることは難しい。だからこそ、自分がどんな部分でバイアスにとらわれているのかを知っておくことは重要だ。

本書の著者は、女／男という性を背負って生きることのややこしさを、真剣に、時にユーモラスに考察する。例えば、女性は生まれながらに「魅力的な女ランキング」に参加させられ、男性は「成果を出そうレース」から降りられない。こんなナンセンスな競争が無くならないわけを、これまた真面目に深掘りしようと試みる。

恋愛観、仕事観、結婚や子育てまで、互いに感じるモヤモヤが漫画で描かれ、ぐいぐい読み進められる。所詮わかり合えないのだという前提で、男友達と本音やうらみつらみをさらけ出し「すり合わせる」コラムが随所に挟まれるのも効果的だ。

他者を、その人の立場に立って理解しようとすることをエンパシー（共感）と呼び、シンパシー（同情）とは区別される。女と男もエンパシーでなら歩み寄れるかもしれない。多様なセクシュアリティを持つ人々への理解が、その営みの延長線上にあることも、本書はきちんと指摘している。